

信 毎 歌 壇

小島 なお選

熱湯が気化する音がする夜中「そういうもん」つて言わないで、ねえ。(佐久市) いわまむかし
 髪伸ばし長い階段を下りてくる書類を全部をんなに持たせて
 (東京都小平市) 真鍋 真澄
 犬の死を見届けた祖父の死をなかつたことにした認知症
 (熊本市) 夏風かをる
 自動販売機からこぼれ落ちた音不意に滅亡に向かふ何かを暗示す
 (長野市) 近藤 光子
 誰にでも愛想のいい犬ならばすぐに貰い手つくであつたら
 (上田市) 矢島 美穂
 高齢者夫をくしくし七割にわれも加わり秘なけ合えり
 (上田市) 児玉やすえ
 少しずつ雪は消えゆき入コップと運帯感なき日常残る
 (長野市) 北沢 京子
 集まりて孫らが作る餃子鍋遊学の部屋入マホに届く
 (松本市) 興 絹枝
 風呂敷に差し入れ料理包みたる結び目つまく孫は持ちたり
 (佐久穂町) 石田 弘子
 耕運機で春眠畦切り刻み罪の重さに線香手向ける
 (小川村) 久田 麗

第一首、ケトルか加温器か。しゅーと音のひびく静かな部屋。決めつけとも諦めともとれる言葉の残酷さ。第二首、前時代的な「偉い人」。「をんな」という言い方も含めてシニカルな批評性が光る。第三首、犬の死を忘れてしまったことは祖父をすこし幸せにしてくれただろうか。第四首、日常の何気ない一瞬に差し込む予感のような不安。滅亡するときはずっと缶のごとく真逆さまに。

選評

米川 千嘉子選

児童らは点字の授業終えしわれを「パブリカ」歌い校門へ送る
 (千曲市) 上原 博司
 四圍まで行くらし隣の少女たち声かけぬまま「しなの」を降りる
 (松本市) 川村 聡子
 春の風後ろから支えてくれたならツルやまでとキ口歩けるだろう
 (池田町) 小口 美和
 根をかじる幼虫を退治せし孫の合宿祝ひセラニツム笑む
 (埼玉県鶴ヶ島市) 由井 寛男
 移送される夫に付き添ふ若き医師車内でわれをいたはりくれぬ
 (飯山市) 市村紀久子
 ガトーショコラに散らす金箔世界には希望という美しい語がある
 (松本市) 飛 和
 指はっちゃん孫と頼いて鳴らせとも若き日の音終に出でざり
 (千曲市) たしまたけ
 しつけ糸またつけたままの音着て新入社員われ起立せし
 (上田市) 竹内 創造
 看護師に白が母に似しと言われたり何となく一日気分良き日だ
 (長野市) 池田よし江
 夕暮れてあんずの里はアカゲラの音遠のきて花に沈みぬ
 (千曲市) 中村 妙子

第一首、小四の授業だという。作者を囲んで「パブリカ」を歌いながらゆく子どもたちの声や姿が浮かんで来て明るい。第二首、初めての四圍か。少女たちの高揚をほのぼのと見送る作者の気分も伝わ

選評

小池 光選

足痛いじじいは居間に象が着たような下着を今日も干しおり
 (長野市) せきたつお
 じらを撒き行きしこの道ちゃんとん屋幼き我ら後に
 (飯綱町) 坂井 秀男
 残雪の山を見ている老夫婦軽トラックの荷台の端に
 (安曇野市) 堀部 明晃
 戦況のニュースを消して見る夕陽美しかりし深出づるも
 (上田市) 小林さよ子
 消防の功績で叙勲受けし友家族葬にてひっそりと逝く
 (御代田町) 柳沢 光雄
 お茶席に振袖姿の女兒の来て小さな花が開いた様な
 (泰阜村) 松島 房子
 「来ないねー」「来ないですよ」とエレベーター
 まつ老一人ボタンを押さず
 (長野市) 宮崎 久子
 冬面い外す足元福寿草黄色いこびと踊るがごとく
 (信濃町) 吉沢 英夫
 落胆の朝はお粥にしまししょうか生死にかかわることでもないし
 (佐久市) 高橋衣里子
 午後の雨音を消しつつ雪となりたちまち街を白く包めり
 (松本市) 興 絹枝

第一首、一読爆笑。象の下着とはどんなものだろう。考えてみると人間の下着は年を重ねるほど大きくなるものようだ。おもしろい自画像。第二首、むかしチンドン屋というものがあって、歌の通り、こどもたちは追いかけたもの。なつかしい。チンドン屋消えて道は残る。第三首、農作業に行くところだろうか。老夫婦がただ黙って残雪の山を見ている。寡黙な歌だが映画の一場面のような。

選評

かの旅に求めし木彫の熊なれど満月にふと歩き出すやも
 (飯山市) 小野沢竹次
 かな作品仕上がりふつと気の緩みひたすら紙める
 (岡谷市) 山岡 はな
 アイスクリーム

ボツケからハモニカ出して公先生小五の我ら張り切り歌う
 (長野市) 松本 博人
 スペインの土産はむらさきベレー帽いつかぶらうかい(こへ行)つか
 (長野市) 豊田 恰子

生きている伊勢えび本当にありがたうバタバタするのをながめています
 (千曲市) 荒井よし子
 去年見た万年青は赤く実をつけて天竜川の河岸段丘
 (松川町) 小川 陽子